

# 開かれた学校経営に向けたファシリテーターの役割

## ー外国語活動を基軸とした小中の連携関係の構築に向けてー

学校力開発コース（10220922） 渡 邊 智

平成 23 年度からの小学校高学年での外国語活動の必修化に伴い、英語教育の分野での小・中学校の連携は、喫緊の課題である。そこで、本研究は、県内の小・中学校教師を対象に行なったアンケート調査を基に、英語教育における小・中学校の接点を探ることを第一目的とする。更に、そこで得られた協同関係を活かして、児童会活動と生徒会活動など様々な分野での小・中学校の連携の可能性について実践的に検討する。

[キーワード] 小学校外国語活動、英語入門期の指導、中学校区における小中連携、中一プロブレム、

### 1 問題の所在と方法

#### (1) 問題の所在及び研究の背景

平成 23 年度より、全国の小学校 5・6 年生において、週 1 時間の外国語活動が必修となる。それに伴い、平成 24 年度より完全実施となる中学校学習指導要領外国語科の目標には、小学校での学びをふまえ、「聞くこと」、「話すこと」に加え、「読むこと」、「書くこと」が明示され、4 技能をバランスよく育成することが求められることとなった。このことは、これまで以上に、外国語教育における小・中学校間の連携が重要となってきていることを意味している。一方で、平成 20 年度の調査によれば、外国語教育に関して、小・中連携に取り組んでいる中学校区は、全体の半数以下に過ぎないとの報告がなされている（文部科学省、2009）。小・中学校間の連続性のある英語教育は未だ発展途上にある状況といえる。

また近年、中学校進学に伴う学習量の増加や人間関係に適應できないことなどから生じる「中 1 プロブレム」が指摘されている。平成 21 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省、2010）によれば、小学校における不登校児童数は、全児童数の 0.32%（312 人に 1 人）であるのに対し、中学校では、2.77%（36 人に 1 人）に達すると報告されている。このような状況から、教科指導面での連携だけでなく、生徒指導面などより広い視点立った小・中の連携関係の構築が求められていると言える。

#### (2) 研究の目的

本研究は、英語教育における有効な小・中の連携関係の提案を第一の目的としている。また、ここで得られる協同体制を活用し、教師と教師、児童と生徒のレベルでの小・中学校の連携の可能性について実践的に探っていく。

#### (3) 研究の方法

1 年次は、中学校区における総合的な連携関係構築のきっかけとして、英語教育に着目し、先行研究の検討や山形県内で小・中学校教師の外国語活動及び英語教育に関する意識の違いを知るためのアンケート調査の結果の分析を行う。2 年次は、児童会活動や生徒指導面など様々な分野での連携の可能性を検討する。

### 2 先行研究の検討

#### (1) 大阪府寝屋川市小・中英語教育推進委員会の実践

大阪府寝屋川市においては、平成 14 年度より、「小・中一貫の英語教育の構築」を主題とする研究が行なわれている（加賀田、2010）。平成 16 年度に、市内の小・中学校に「国際コミュニケーション科」（以下、IC 科）が設置され、現在では、小学校低学年で 10 時間、中学年 20 時間、高学年 35 時間、中学校では、各学年とも年間 35 時間、それに従来からの外国語科 105 時間と合わせた小・中一貫の英語教育が行われている。注目すべきは、小学校外国語活動で扱った題材、表現、語彙をリストアップし、共通性の高いものを用いて、「中学入門期シラバス」（表 1）を作成し、中学 1 年 1 学期中間考査までのレスンプランを提示しているこ

表1 中学入門機シラバス（一部抜粋）

回数	テーマ	指導目標	表現	語彙
1	名前/あいさつ	・自分の名前を言うことができる ・基本的なあいさつができる	Good morning./Good afternoon. Hi! My name is ～. Please call me ～. Nice to meet you. See you.	
6/7	好きなもの、嫌いなもの	・好きなものについて尋ねたり、答えたりすることができる ・嫌いな物を言うことができる	A: Do you like ～? B: Yes, I do./No, I don't. I don't like ～. A: What (sports/animal/food/color) do you like? B: I like ～.	(food) apple, lemon, orange, banana (sports) baseball, soccer, basketball, volleyball… (color) white, black, red, blue…

とである。このシラバスを用いて、中学校教師が小学校での取り組みを意識しつつ入門期の指導を行うことで小・中学校間のスムーズな橋渡しが可能となり、小6（12月実施）から中1（7月実施）にかけて行われた調査においては、「IC科の授業が楽しい」と回答する割合がそれぞれ、約5ポイント、約10ポイント高くなったと報告されている。

## (2) 北海道教育大学附属釧路小・中学校の実践

平成16年度から3カ年計画で連携関係を構築した実践である（木塚他，2008）。釧路小・中学校では、各年次の目標を下記の表2のように設定した。

表2 年度ごとの目標と主な活動

1年目（平成16年度） 「連携を進めようとする学校間で、お互いの信頼関係を築く期間」 〈主な活動〉 ・連携コーディネーターを決める ・小学校・中学校の教師による相互の授業参観
2年目（平成17年度） 「連携の内容や方向性を明確にし、具体的な連携を部分的に試みる期間」 〈主な活動〉 ・お互いのことを一緒に考える姿勢の形成 ・共通する「育てたい子ども像」の明確化 ・指導法における共通した取り組み
3年目（平成18年度） 「連携の基礎を確立し、本格的な連携の実をあげ、連携を軌道に乗せる期間」 〈主な活動〉 ・学校全体での英語活動への取り組み ・リーダーティーチャーの育成 ・中学校英語教師の協力 ・カリキュラムの作成

各年度の到達点を明示し、それら一つひとつに時間をかけてじっくりと実践していくことで、小・中学校間の確固たる協同関係を生み出すことに成功した事例といえる。また、行政や管理職主導ではなく、連携コーディネーターを中心とした推進体制をとったことで、職員の

小・中連携の必要性に対する意識の差が小さくなり、円滑な取り組みが可能となったと報告されている。

## (3) 小・中学校教師の意識に関する調査の例

岐阜県岐阜市において、小学校教師と中学校英語科教師の外国語教育に関する大規模な調査が行なわれた（山口，異，2010）。この調査では、小中連携の必要性に関する意識、校区内の小中連携の実態、小中連携の内容、小学校英語活動を通して育てたい力（態度面及びスキル面）、小学校外国語活動が中学校英語科の授業にあたえる影響について、小・中学校教師合わせて153名を対象にアンケート調査を行なっている。中学校区単位での連携が進んでいないこと、中学校教師が「大きな声で話す」、「誰とでも積極的に話す」、「外国の人に積極的に話す」、「友達と教えあう」といった態度が育成されることを期待していること、また、スキル面では、「ローマ字の習得」や「アルファベットを読む」といった、中学校のリーディングやライティングに役立つと思われるような項目をより重要視しているという実態が報告されている。小学校外国語活動では、スキルの習得ではなく、コミュニケーションに対する積極的な態度の育成がその目標とされている。したがって、従来行なわれてきた中学校英語教育の目標をそのまま当てはめて考え、スキルの上達を望むことによって小・中学校教師間に、何らかの隔たりが生じる可能性が指摘されている。

これらの事例から、小・中連携を考える上では、互いの取り組みとそのねらいを知り、互いの信頼関係を築くことが大変重要であることがわかる。岐阜市で行われたような連携の対象となる学校の情報を得るための調査や、その実態に応じた体制作りが必要と考えられる。その際に、釧路小・中学校の実践のように、段階を

意識した連携関係構築が有効と考える。英語教育の観点からは、小学校の外国語活動を基に、中学校入門期の指導計画を作成し、実践することで、生徒の意欲を向上させることに成功している寝屋川市の実践が参考になると考える。英語の円滑な接続を行うためには、小学校で用いた語彙、文型、クラスルームイングリッシュを使った中学校での指導を行うことも有効と考える。入門期だけでなく、英語が必修となる5年間を見通した中学校区共通の表現例集のようなものがあれば更に良いだろう。

### 3 実践と結果（明らかになったこと）

#### (1) アンケート調査の実施と結果

先行研究の検討をふまえ、昨年12月、本市の山形市内連携協力校、及び、現任校区の小学校高学年担任教師と中学校英語科担当教師、合わせて72名を対象に、「英語教育における小中連携の可能性を探るためアンケート調査」（資料参照）を行なった。結果は以下の通りである。

#### 【小学校】

No	質問	回答	%
①	今年度の外国語活動の実施時数	35 時間	72.9
		30 時間	2.1
		25 時間	2.1
		20 時間	22.9
②	時間の設定	毎週行う	70.8
		まとめて	18.8
		その他	10.4
③	授業の主体者	学級担任	89.6
		外国語担当教師	10.4
		ALT	10.4
		ゲストティーチャー	2.1
		その他	6.3
④	英語ノート以外に使う教材	ある	8.3
		ない	91.7
⑤	④の具体名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TOSS フラッシュカード</li> <li>・ 五色英語カルタ</li> <li>・ 自作教材</li> <li>・ インターネットサイト「学校英語ハピラボ」の絵カード</li> </ul>	
⑥	必修化に伴う不安や負担	ある	60.4
		ない	37.5
⑦	不安や負担の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分自身の英語力と指導力</li> <li>・ 事前の準備時間を確保できるか</li> <li>・ ALT の確保ができるか</li> <li>・ 45 分間の進め方に不安がある</li> <li>・ 評価の行い方と記載の手間</li> <li>・ 35 時間きちんと行えるか</li> <li>・ 小学校への取り組みを中学校ではどう受け止めているか</li> <li>・ 中学校で英語に接した時の新鮮さがなくなる</li> <li>・ 英語ノートの内容が少ない</li> </ul>	

③	中学校英語科教師への期待	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外国語活動と中学校英語の目的の違いを理解してほしい</li> <li>・ 小学校で授業をしてほしい</li> <li>・ ALT をもっと派遣してほしい</li> <li>・ 中学校から見て小学校でどのようなこと行えばいいか教えてほしい</li> <li>・ 小学校での指導を生かした指導をしてほしい</li> </ul>
⑨	連携の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ それぞれの目的が違うことを理解する場を設ける</li> <li>・ 情報交換のための話し合い</li> <li>・ お互いの授業参観</li> <li>・ 中学校教師が小学校で授業をする</li> <li>・ 中学校の教科書を小学校に置く</li> <li>・ 小中連携したカリキュラムの作成</li> <li>・ 中学校までに覚えてほしいことのリストを作る</li> <li>・ 中学校のカリキュラムを知ること</li> <li>・ 教師同士の交流</li> <li>・ 中学校の教師との TT</li> </ul>

#### 【中学校】

No	質問	回答	%
①	小学校で英語を学んだことによる生徒の変化	感じる	0
		やや感じる	54.2
		あまり感じない	41.7
		全く感じない	0
②	①の具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ あいさつや簡単な言葉への反応がよくなった</li> <li>・ ALT に気軽に話しかけられる</li> <li>・ 英語に対する抵抗感がない</li> <li>・ 知っている単語が増えた</li> <li>・ 話すことへの意欲が高くなったが、書くことの意欲が落ちた</li> <li>・ 英語に苦手意識を持つ子が増えた</li> </ul>	
③	小英の研究会への参加	ある	33.3
		ない	66.3
④	③の過去3年間での回数	1 回	50.0
		2 回	37.5
		3 回	0
⑤	英語ノートを見た経験	ある	66.7
		ない	33.3
⑥	学区内の小学校の指導方法や内容の理解	全校について知っている	8.3
		1 部の学校を知っている	25.0
		全く知らない	66.7
⑦	中学校区内での話し合い	ある	33.3
		ない	66.7
⑧	今年度の⑥の回数	1 回	75.0
		2 回以上	0
		その他	0
⑨	小学校外国語活動への期待	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ローマ字学習の徹底</li> <li>・ 英語に親しむ活動をしてほしい</li> <li>・ 外国語を話すことを楽しいと感じる活動をしてほしい</li> <li>・ 英語学習のきっかけ作り</li> <li>・ あいさつや文化習慣の違いに気付くような活動</li> <li>・ 外国語だけでなく日本語にも力を入れてほしい</li> <li>・ 普段無意識に使っている英語に気付くような活動</li> <li>・ 教え込みすぎず、気軽に取り組んでほしい</li> <li>・ 英語そのものとそれによって開け</li> </ul>	

		る世界に関心を持ってほしい ・たくさん聞き、たくさん話すこと ・アルファベットの習得
⑩	連携の方策	・授業研究会への参加 ・ALTの交流 ・それぞれのねらいを確認する ・定期的な情報交換の場の設定 ・お互いの授業参観 ・使用した単語リストの作成

## (2) アンケート調査から明らかになったこと

小学校では、学級担任の教師が主体となり、主に英語ノートを用いて、外国語活動が進められている。多くの学校で、毎週外国語活動が行われているが、来年度の必修化に向けては、準備や評価に不安を抱いている教師も多い。多くの小学校教師が、中学校の教師が、外国語活動の目標を理解してくれることや何らかの形で授業に関わってくれることを望んでいる。中学校で、多くの生徒に態度面での良い変化が見られていることは、小学校での外国語活動の成果といえる。しかし、自校区の小学校の取り組みを十分に理解している中学校教師は少ない。多くの教師が、外国語活動が目標とする、コミュニケーションの楽しさを養ってほしいと望んでいるが、一部、早期英語教育を望む意見も見られる。共通点としては、互いが、授業参観や話し合いの場を設けることなどによる情報交換の重要性を感じていることが挙げられる。

## 4 考察

小・中学校の連携関係を構築するためには、何らかのきっかけやお互いの必要感が大切であると考え。新学習指導要領が本格的に実施される今、互いが連携の重要性を認識している「英語」が、きっかけとして有効である。まずは、中学校区内の担当者が集い、お互いの取り組みのねらいや指導状況を伝えあう場を設定することが必要であると考え。そのような会を重ねることで、木塚他(2008)が述べている互いの信頼関係が構築されることがある。また、加賀田(2010)が提案している、学区内で使う語彙や表現に関する独自のリストのようなものを作成することで、小学校の教師が抱えている不安感も多少は軽減されることがある。小・中学校教師によるティーム・ティーチングや六年生に中学校英語教師が出前授業を行うことも、これまで小学校で習ったことが中学校でも使われているという実感を抱かせる場として有効で

あると考える。更には、英語教育の実践を通して得られる協同関係を、様々な分野での連携に活用していくという視点を持つことで、より多くの情報が得られ、より多くの接点が見えてくると考える。それにより、小・中学校間にあるギャップが埋められ、教師間、学校間の交流が活性化していくものと考え。

## 5 到達点と課題

ここまでの研究では、外国語活動や英語教育に関して、今、何が必要とされ、何が問題となっているのかを明らかにすることができた。同時に、小・中学校教師が、お互いを知ることの重要性を感じている実態が明らかになった。

今後は、小・中それぞれの管理職や中学校の英語教科部会、小学校の外国語担当の教師など、様々な立場の教職員からの協力が不可欠である。互いの思いを汲みつつ、合意形成を促進する、ファシリテーターとしての役割が重要である。また、情報交換の時間を生み出すことも必要である。また、中1を対象に、入学当初つまづきを感じた場面を調査することも、多様な場面での連携の可能性を探る上で有効であろう。

## 引用・参考文献

- 木塚雅貴編著(2008)『小・中連携を「英語」で始めよう！―「小学校英語」必修化に向けて―』、(日本標準ブックレット) 日本標準  
 山口美穂；巽徹(2010)『英語教育における小中連携に関する一考察 - 「小学校英語活動」に関する岐阜市の小中教師の意識調査』『岐阜大学教育学部教師教育研究6』: 203 - 213  
[http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/kyosi/pdf/6\\_24.pdf](http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/kyosi/pdf/6_24.pdf) (2010.10.16 入手)  
 兼重昇・直山木綿子(2009)『小学校 新学習指導要領の展開 外国語活動編』、明治図書  
 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 外国語編』、ぎょうせい  
 加賀田哲也(2010)「小中連携を視野に入れた中学入門期の指導 - 入門期シラバス作成の試み - 」、『英語教育』、第59巻、第9号、pp. 28 - 30.  
 文部科学省(2009)『英語ノート1, 2』、教育出版